

# フィラー体系化のための調査研究

## A Research for systematization of Japanese fillers

小出慶一（教養学部・教授）

KOIDE Keiichi Faculty of Liberal Arts・Professor

### 1 研究の経過

2006年度は次のような作業を行った。

- 1) 「日本語対話データベース」（北九州市立大学）から、入力系のフィラーとして「あ」「え」など、出力系のものとして「あの一」「その一」「この一」「えー」「えーと」「まあ」「なんか」の用例を収集した。  
また、同時に、ラジオなどから講演、複数の参加者による座談などの録音データから、上記のフィラー収集を試みた。
- 2) 上記のデータに基づき、順次分析を進めことに並行して、フィラーに関する先行研究の収集、関連領域の文献等の収集を行った。
- 3) 「あの一」「その一」「この一」についての分析をまとめ、「フィラー『この一』『その一』『あの一』：その由来、機能、相互関係」と題して、『埼玉大学教養学部紀要』42-2（pp. 15-29）に発表した。

### 2 結果の概要

『埼玉大学教養学部紀要』42-2に発表したものを中心に、以下に結果を述べる。

データを分析した結果、3つフィラー「この一」「その一」「あの一」の基本的な性質について、次のように捉えた。

この一：発話時にある表現内容が心的に思い浮かべられているが、その内容を表す形式が確定していないとき、その内容を指す。

その一：後続発話内容が、話し手にとって非関与的領域のものであること、話し手の独占的関与を主張できないものであることを示す。

あの一：話し手が自分の発想から発話を展開することを前触れする。

典型的には、「この一」は適当な表現が思い浮かばないようなときに現れ、「その一」は相手に関わる話題、あるいは話し手にとって共感できないような意見を導入するような場合、「あの一」はコミュニケーション場面を開始したり、相手の理解状況をモニターし発話調整を頻繁に行うような場合に現れると予想される。

これらは、談話内での機能という観点から見ると、それぞれ次のような機能を持っており、談話に対する関わり方の違いが見られる。

- この一：言語化以前の内容そのものの指示
- その一：談話参加者と談話内容領域の関係の表示
- あの一：談話形成に関する対人的な調整

このような違いは、指示詞としての本来の性質によっていると思われるが、この3つのフィルターは、談話の形式、談話の参加者と内容領域という2つの軸によって整理すると、次のような対立が見られる。

- 【コ：ア】 談話の形式に関する心的な操作
- 【ソ：ア】 談話の内容に関する心的な操作

この対立は、指示詞コソアが持つ2つの用法、現場指示と文脈指示の2つの性格を受け継いでいるものと思われる。三上章（1955、1970）が提案する【コ：ソ】×【コ：ア】という対立ではうまく捉えることができず、黒田成幸（1979）などの主張する【ソ：ア】という対立、つまり、指示詞がその探索を指定する領域の区分である直接性と間接性という区分が保持されていると見るができる。指示詞がフィルター化することによって多機能化現象の一つと考えると、これは、新たに獲得されたものではなく、元来持っていた性質が保存されたものと見るのが妥当であると思われる。また、指示詞研究で問題にされる「中距離のソ」（聞き手領域ではない対象に対して使われるソ）の性質を受け継ぐものも、話題導入などの際に現れる「その一」に見ることができ、指示詞からの派生したものであることをうかがわせる。

また、フィルター化することによって、新たに獲得した性質も見られた。それは、指示詞が持っていた前方照応性が失われ、コ系以外にはほとんど見られない後方照応的な用法のみになったことである。これは、具体的な指示語（先行詞）を失うことによって、後続する発話内容を、心的に思い浮かべられたものを、いわば現場指示的に指すことへと機能を移すことによって可能になった用法であると思われる。その結果、注意の対象が、命題内容から、これから行われる談話ないしは発話行為へと変換され、聞き手への内容予告的な談話標識性も持つことになる。

以上の知見は、「あの一」についての先行研究で言われていた「名前の検索と適切な表現の検討」という「心的操作を行」うものだとする見解（例えば、定延利之・田窪行則 1995）「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの一」」『言語研究』108：74-93と大きく異なるものであり、これまで議論の再検討を求めるものである。

### 3. 今後の計画

データを収集した他のフィルター「え一」と「え一と」、「まあ」、「なんか」「もう」など、主としてしゅつりよくに関わるフィルターについて、分析を進め、フィルターから見える発話過程がいかなるものか検討する予定である。また、フィルターの体系という点では、自立語からの多機能化によってフィルター化したものとそうでないものに、大きな性質の違いが予想され、言語変化についての検討の一つの視点になるのではないかとと思われる。その点についても、副詞起源のフィルターについて検討を進める予定である。